

顔

宮本百合子

青空文庫

ルイザは、天気にも、教父にも、または夫のハンスに対しても、ちつとも苦情を云うべきことの無いのは知っていた。

自分達位の身分の者で、村の誰があんな行届いた洗礼式を、息子に受けさせてやったらう。四月の第二日曜のその朝、天気は申し分のない麗らかさであつた。暖い溶けるような日の色といい、爽やかな浮立つような微風といい。彼女は、ハンスと婚礼した時からの思い通り、由緒ある伊太利亜^{イタリア}レースの肩掛にフランクスを包んで、教会に行つた。

ハンスは気張つて、きまりの献金のほかに、打紐で飾つた二本の大蠟燭と見事な花束とを聖壇に捧げた。

教父は至極懇ろであつた。

丁寧そそにフランツの頭に聖水を灌ぎ「主の忠実なる僕、ハンス・ゲオルグ・ヨーストの一家に恵深き幸運を授け給え」と、祈祷書にない文句さえ、足して称えてくれたのではあるけれども、ルイザは、教会からの帰り、見晴しのよいだらだら坂を、滅入った心持で下りた。彼女には、仕立屋のカールが、不意とフランツをあやすのをやめた、そのやめかたが気になっていた。郵便局の細君が、フランツのくるまっているレースをことさらに褒めた。その褒めかたがルイザの心持を曇らせたのであつた。

彼等が、小ぎつぱりとした安息日の盛装で教会の広場に現われると、真先に見つけて近づいて来たのは仕立屋のカールであつた。

彼は、のしのしと大股に近づいて来た。そして腕を振り廻してハンスと握手した。

「どうだね」

彼は、酒肥りのした厚い瞼の間から、じろりとルイザの抱いているものの方を見た。

「男かね、女かね」

ハンスは、口のまわりに微かにばつの悪そうな表情を浮べながら低く答えた。

「男の子だ。——親父の名を貰ってやったさ」

「ほう！ 男とはうまいことをやりおった。せつせと金箱を重くしても、娘っ子に攫さらわれちゃあ始らないからな」

仕立屋のカールは、ルイザの方へやって来た。ルイザは初めての児を褒められた嬉しさに、自分の方から膝をかがめて挨拶した。「どれどれ、一寸のぞかせて下さい。儂でもこれわしで三人孫をあやして呼吸は知っているよ」

ルイザは、フ란ツの額の上からレースをどけて顔全体がよく見えるようにした。

カールは、大儀そうに腰をかがめ、キ、キ、キ、と舌を巻きあげながら、年寄らしい愛嬌をふり撒いた。

「ふむ、なかなかよい児だ。男になれよ」

が、彼はふと訝しそうに眼をルイザの顔に移した。ルイザは彼が何か云うのかと思った。ところが、仕立屋はそのまままたさり

げなく嬰兒を覗き込んだが、今度はほんのお義理で、ちよいちよいとフランスの頬を突つくと、さっさと、一言の挨拶もなく男達の群に戻って行つてしまった。

ルイザは、鋭い痛みが、胸の真中を刺しとおしたように感じた。何という変な爺さんなのだろう。

程なく、ルイザの囲りは新たに賑やかになつて来た。

彼女のまわりでは、女達の白い大頭巾が彼方此方に揺れ、絶間ない話し声さざなみが漣のように拡つた。そのうち誰か一人が、後を振向いて一寸傍によつた。その前に喋っていた女は言葉を切つてその方を見、途をあげた。ルイザが縫物を習つたことのある配便局の細君が、まるで町風に派手な帽子をつけ、踵の高い靴を耀かせて

やつて来たのであった。

郵便局の細君は、ルイザに近よりきらないうちから誰よりも大きな声で話し出した。

「まあまあ、立派な阿母さんにおなりだこと。ついこの間までほんのねさんだと思っていたのに——」

ルイザの後に立つと、彼女は、傍で挨拶をした一人の女を見向きもせず、指環の三つはま嵌った手を延して、レースをどけた。

「どれ、——ふうむ、いい児だこと」

郵便局の細君は、フランツの顎の下をこす擦った。伏目になって微笑みながら子供の顔を見ていたルイザはやがて、おやと思つてひそかに注意を集めた。フランツの顎を擦っていた細君の光沢のあ

る指先の働きは、妙にのろくなつた。そして、ルイザにははつきり感じられた一種の感情をもつてそのまま止つてしまった。下を向いたまま彼女は自分の顔と嬰兒の顔とが素早い偷むような一瞥で見較べられるのを感じた。指先は、そつとフ란ツのくくれた軟い顎の下から引こめられた。そして、郵便局の細君は、ほんの一足ルイザからどき、殊更な、まるで溜息と一緒にはき出すような調子で云つた。

「まあ、綺麗なレースをお持ちだことね」

ルイザはかつと眼の裏が熱くなるように思つた。

レースは確に結構なものであつた。彼女の曾祖母が、サクソニ―太公夫人の侍女を勤めた時拝領したそれは、まがいなしの伊太

利亜絹レースであつた。それを褒められるのは嬉しかった。彼女が嫁入りに母親から貰つた唯一の本当に立派なものだつたから。

けれども、この人は、また何という妙なほめようをするのだろう。焦々した思いがつき上げて来た。ルイザは、フランスの顔を見たまま、はつきり呟いた。

「何てお前はお祖父さん似なのだろう。私の子でないと思われるよ」

然し、云つたあと、猶、ルイザの心持は悪くなった。鐘が鳴り渡つて、ルイザも定りの腰架についたが、彼女には、自分達の捧げた二本の大蠟燭がちつとも他の蠟燭と違わない色や形で聖十字架の前に燃えているのが、ひどく物足りなかつた。焰が美しく揺

れる度ごとに「フランスのために」とでも、高らかに歌いながら輝いてくれれば好いのに！

ハンスは、ルイザの心持は知らず満足して、大股に悠ゆうくり教会から歩いた。家へ妻と嬰兒を送りとどけると、盛装のまま、また出て行つた。

独りになると、ルイザはためていた涙をぽたぽた膝の上に落した。そして、頭を振つた。彼女には、今日自分が経験したいやな思ひは何でもない、ただ、自分等夫婦とも、髪は金色で碧い眼を持つてゐるのに、生れたフランスばかり何故か黒い捲毛と黒い眼をしてゐるからだ、はつきり分つたのであつた。

全く、フランスは、ひとによく目をつけられる児になった。

村には彼のほかに沢山、黒毛で黒い眼をした男の児がいる。それなのに誰もそれ等の児には目をとめない。村の者でも、町から用事に来た者でも、フランス・ヨーストの小さい顔を見ると、この世で初めて髪や眼の黒い子供に出逢ったように長い間じつと彼を視た。

ルイザが一番気にしたのは、そんなにしげしげ眺めながら、彼等が一人として普通ごく自然にするように「ほほう、好い子だ」とか「これは可愛い」とか暖い、彼女もよろこぶ感歎の言葉を洩さないことであつた。ルイザが見ていると、或る者は、殆んど、驚くべきものを道傍で発見でもしたように、眼を睜^{みは}り立ち止つて、

無心なフランツを熟視した。けれども、傍の時計屋の入口で手を腰に当てて厳しい顔で此方を見張っている彼女が母親だと判ると、俄にわざとらしく空咳をしたり髭をしごいたりして、歩き始める。フランツが自分に解らない理由で、理解出来ない注目の焦点になるのを見ると、ルイザは何ともいえず不安に居心地わるく感じた。

追々片言を喋るフランツに、何か云いかけている耳なれない声をききつけると、ルイザは、
「フランツ！ フランツ！」
と、息子を呼んだ。

フランツは馳けて来る。

ルイザは、彼の顔や体を仔細に見まわし、何処にも別状ないのを見極めて、裏に連れ出した。

「さあいい子は暫くこっちへ来てお遊び。ガーガーが、フ란ツ来い来いと呼んでるだろう」

裏は空地で、余りよく耕されていない礫まじりの甘藍や蕪^{かぶ}の畑、粗末な板囲いの家畜小屋があつた。小屋の中には五匹の親子づれの黒い粗毛の豚がいた。三羽の鷺鳥は、フ란ツの前を走つて逃げながら、喧しい声で鳴き立てた。フ란ツは、乾草熊手に跨つて黒い捲毛をふり立ててその後を追ひ廻す。

ルイザは、よく夫のハンスに云つた。

「お前さんはどう思ひなされるか知らないが、私はあのフ란ツは

苦勞の種ですよ。あんな小さいうちから、あんな人に気をつけられる児というものを見たことはありやあしない。それも、何で見られるのか判れば私だつて気が楽だけど」

夫婦が、店に続く奥の小部屋で木の卓上に向い合い、こんな話をする時分、フ란ツは、彼の藁床でもうぐつすり寝ついていた。ハンスは、黙つて、長いこと陶器のパイプを噛む。やがて持ち前の重い口調で云つた。

「時が来れば、わかるだろう。——まるで案山子かかしでもなさそうじゃないか——」

ルイザは、赤い更紗のカーテンで半分かくされているフ란ツの臥床を眺めた。

「——俺の大祖父はやっぱりあのちびのように黒い眼をしていた
つけが——死ぬ時分には村の書記で、名も憶えられる者になった」
ルイザは、黙って疑わしそうにちらりとハンスの顔を見る。二
人はそのまま黙り込んだ。四辺が余り森として、夜の空気の中に
フ란ツの寝返り打つ氣勢さえしないと、ルイザは突然訳のわか
らない不安に掴まれた。彼女は遽しく、而も蹙音を忍ばせて、カ
ーテンの傍によった。そして、そおつとフ란ツの寝顔を覗き込
んで、また自分の腰掛けに戻る。一寸気がつかない間に、何処へ
かいなくなつてでもいはしまいかという烈しい意味のない懼れが、
ルイザを焼くような思いで腰掛から追ひ立てるのであった。

不思議な心配、ルイザの絶え間ないぼんやりした恐れの間に、

フランツは段々成長した。

フランツは、小学を終る前の年、堅信礼を受けた。

その年の万聖節の夜の彌撒^{ミサ}は、ルイザにとって、婚礼の時のような晴がましい亢奮を感じさせた。フランツが、同じときに信徒名を授けられた少年と一緒に、初めて聖歌合唱をすることになったのであった。

定りの礼拝と祈祷とがすみ、教父がきらびやかな法服の裾を引いて聖壇の前の椅子につくと、ルイザは、我知らず胸に下げた数珠を握りしめて正面を見つめた。静々と聖壇の右側の扉が開けられた。純白の寛上衣をつけ、片手に譜本を持った赭毛の男の児が

真先に現れた。会衆のざわめきも他処に一人一人出て来る順に手繰り込むように目の前をやり過しながら、ルイザはフ란ツの姿を待った。

彼は、四番目に現れた。真面目な顔つきで、自分の場所に立つと傍見もしない。あと二人のルイザに誰か分らない男の子が続いた。

皆は一列に並んだ。一声、長い、引くようなオルガンの音が響き渡った。四辺が水を打ったように鎮りかえった。歌い手達は、一斉に両手の間に譜を拡げた。期待に満ちた、静寂を破ってオルガンは、徐ろに^{おもむ}莊重な四重音で一小節、歌の始りを前奏した。息をため、心をこめて六人の少年歌手は「ナザレのふせやに」とい

う文句で始る信徒生涯の聖歌を歌い出した。

ルイザは、子供るときから幾度も聴いたなつかしいその節をきくと、ぞつと身中にさむけが走るように感動した。彼女は蠟燭の煌^{かがや}きの反射する、香の薫りのうつすり立ち罩^こめた腰架の上で、低く頭を下げた。

うつとりとして聴き入っていると、ルイザには、次第にフランツの声ばかりが聞えて来た。たつぷりした響の美しい彼の声が、真心をこめて幅ひろく流れ下りまた高まるに従つて、他の入り混つた幾つもの声が、優しく一つ低音に漂つたり心も躍るように晴々高い声で顫えたりする。

ルイザは、それまで一度もフランツが本気で歌うのを聞いたこ

とはなかった。何という立派な声を持っていたのだろう。

ルイザは上^の気^ぽせた顔を挙げ、讃歎でうるんだ眼をフランツに向けた。刹那に、彼女の相好が変った。彼女は、何ともいえない顔をして、無意識に傍にいる夫のハンスの方に片手を伸した。

「フランツ、フランツ——あれが、フランツ？ ああ、神々しい——……」

ルイザは、瞳をつき出し、微に口をあけ、打たれたようにフランツを視た。

ああ、まさか、彼方の聖画の命が入って、少年イエスが代って立っているのではあるまい！

我を忘れて唱うことに身も心も打ち込んでいるフランツの顔を

正面から聖壇の大蠟燭が照していた。小揺ぎもしない金色の輝の環の中で、彼の黒い、精神の燃えたかまつた二つの眼、清い唇、純白の寛衣と黒い捲毛とは、この世のものでなく見えた。ルイザが「聖母まりーあ、ああ御母まりーあ」とくずおれてしまったほど、その顔だちと姿とは絵の少年基督に生きうつしなのであった。ルイザは、震えながら、幾度も幾度も十字を切った。

「ああお恵み深い聖母、こんなことがあつてよろしいものでしょうか。私の眼は今まで何を見ておりましたのでしょうか」

彼女は、始めてフランツが人目を牽いた訳を知った。誰が、お前の子はイエス様にそっくりだなどと、造作なく云えたものか。彌撒が終ると、フランツは、合唱仲間と村長の家へ廻ることにな

っていた。

ルイザは、ハンスの腕をかたく握つて会堂を出た。空は寒く深く晴れ上つて、星が大きく燦いていた。往来の左右にははきよせた四五日前の雪があつた。家々の窓から洩れる灯かげを横切つて、時々黒く人通りがある。

暫く歩くと、路は広い空地にかかった。ルイザは、ぐつとハンスの腕を引いて、彼の耳を自分の口に近く下げさせた。そして、なおよく前後を見廻した後、始めてわかつた驚くべき事実を彼に囁き聞かせたのであつた。

ハンスの、重い口は、思いがけないことでまるで働きを失つたように見えた。彼は、

「ふうむ」と牡牛のように唸った。

黙って考に沈み、凍った夜道で一度二度足をこらせながら、夫婦は家に着いた。ルイザは、鍵を廻して入口の扉をあけた。

「お入りな」

ハンスは、戸口に立ち止って、何か考えながら獣皮帽を手の平で額の後にずらせた。

「いや——俺はフェリクスの店まで行って来ずばなるまい」

ハンスは、また帽子をかぶりなおして出て行った。わくわくしているルイザには、ハンスが帰って来るまでに、どの位時が経ったのかまるで解らなかった。

表の方に登音がしてハンスと一緒に思いがけずフ란ツが奥の

小部屋に入つて来るのを見ると、ルイザは、驚きの叫びをあげて立ち上つた。彼女は何か云いながらフランツにかけ寄ろうとした。が、ぴたりと止り、両手を握り合わせ、殆ど畏怖の現れた眼でフランツを見た。彼はもう白い寛衣は着ていなかった。けれども、これほどありありわかる倂を、何故今夜まで見わけられなかったのだろう。

ハンスは、帽子と厚い外套とを釘にかけた。

「連れがなからうと思つたんで、一寸よつて来てやつた」

彼は、卓子の前に腰を掛けた。そして少しの間ばつの悪そうに剛い髭を指先で撫でていたが、やがてフランツに云い始めた。

「今夜は滅法好い声で唱つたな」

彼は衣囊をさぐり、一挺の小刀をとり出した。

「ほら、今日の祝いだ。失くさないようにしろ」

フランツは嬉しそうににこにこした。

「ほう！ 両刃だね」

ルイザは、卓子の彼方側から、熱心に父子を見守った。ハンスが妙に口を利き難そうにし、何か心に考えを持っていることが彼女によく分った。フランツがすっかり満足し、刃をすかしたり、彫りの模様を検べたりする様子を見ていたハンスは、更に細長い棒のように巻いたものを取り出した。

「これもまあ記念の積りだ。――机の傍の壁にかけられる大きさだと思うが。開けて見ないか」

フランツは、ナイフを置いて、結びめを解いた。そしてくるくと少し内側を拡げると、彼は感歎の声をあげた。

「ほほう！ これ！ まるでいいや」

フランツは、手一杯に拡げたものをルイザの方に向けた。一目見て彼女は息が窒^{つま}りそうになった。それは聖画、しかも先刻会堂で、彼女が、その中の基督がフランツか、フランツがその救主かと震えながら見た少年イエスが博士達と問答をしている画であった。

ハンスは、ルイザの愕きをわざと見ないふりで、フランツに何気なく云った。

「腕一杯だな——脇棚に下げて見よう」

彼はフランツを助けて、二つの壺を重しに使い、棚からその聖画を下げた。燈の工合で陰翳^{かげ}が濃くなり、遠くから眺めると、若いイエスの唇からは今にも活々とした声が響いて来そうに、画中の人物が浮上って見えた。

親子三人は、黙ってじつとその方を見た。やがて、ハンスが息子に云った。

「一寸あの画の傍に立って見ろ」

フランツは、怪訝そうに父親と母とをかわるがわるに見た。

「お前の背があゝの画の何処まであるか見て置きたいのさ」

フランツは、歩いて行つて絵のそばに立った。

「これでいい？」

「もうちつと画によつて」

フ란ツは画中の基督と同じ高さに顔を並べた。ハンスは思わず深く唸つた。ルイザは肱でひどく夫の脇を突きながら、いたたまれないように囁いた。

「御覧なさい！ ああまりーあ、^{さんた}聖まりーあ」

ハンスは、のそりと立ち上つた。

彼は忽然として自分の目の前に現われた二つの少年イエスの顔を見て、名状出来ない氣持に打たれたのであつた。

その晩、夫婦は長いこと、床の中で目を醒していた。ハンスは、彼の考えになれない頭で、自分達親子の運命を思い惑つた。自分のように學問も徳もない平民に、何故あれほど、救世主に似た顔

つきの息子を授けられたのか。考えれば考えるほど解らなくなつて、彼は、ひとりでに太い溜息を洩しては、寝返りを打った。

ルイザは、絶え間なく聖母まりーあを称えながら涙を流した。ハンスが大きな体躯で寝返りを打つ毎に少しずつ傍にずって遣りながら、彼女は、フ란ツの髪や眼の黒いことを私かに不平に思つたり、後の子供達の生れない苦情を訴えたりしたことを、慈悲深い聖母に謝罪した。

このことがあつてから、ハンスとルイザとは、自分の息子に対する心持を変えた。彼等はフ란ツを、時が来るまで——それは勿論いつか判らないが——自分達にあずけられている者と云う恭々しい感じを深めた。もう、人が目をつけることも恐れなかった。

誰か、

「あれはお前さんの息子かね」

とききでもすると、ハンスは元のように眼を逸するようなことはせず、鄭重に答えた。

「さよう、あれはフランツ・アルブレヒト・ヨーストです」

少年のフランツ・ヨーストは、次第に自分の生活が何だか他処の子とは異うようなのに心付き始めた。

例えば、隣のエルンストは、彼と同じ年であつたが、よく父親に怒鳴られて耳を引張られていた。自分は唯の一度父親に耳たばさえつねられたことがあるだろうか。

忘れられないことがあった。

ちようと堅信礼を受けて間もない或る日、彼は父親が直したばかりの自鳴器オルゴールつき懸時計を、仕事場の此方から、彼方の壁に持つて行つて吊ることを云いつけられた。

フ란ツは、時計を捧げて一二間歩いた。が、ちよつとうっかりした機勢はずみに何かに蹴つまずいた。はつと思う間に、大事な時計は彼の両手の間からすつ飛んで、いやというほど彼方の箱にぶつかつてしまった。

フ란ツはぎよつとして首をちぢめ、立竦んだ。ハンスは怒鳴りながら飛んで来た。そしてぐつとフ란ツの肩を掴んだ。がフ란ツが、あやまろうとして父親の顔を見上げると、彼は何故か、

黙つてそろそろ手先の力をゆるめた。やがてすっかり肩から手はずした。そして、却つてフランツを恐れさせた静かな口調で一言、

「もうよい、彼方へ行け」と云つた。

フランツはその時、どんなに父親に怒つて貰いたかつただろう。彼はしんから父に氣の毒に思つたので、出来るなら頬の一つも打つて欲しかった。勿論泣くだろう。けれども、父親が、彼にさえ感じられた努力で癩癩を抑えるのを見るよりは、ずっと後がからりとしたに違いないのだ。けれども、父は、他処の父親が息子を怒りつけるようには怒らなかつた。それがフランツに、寂しさを与えた。

母親についても、彼の感じは同じであった。他の村人や学校の教師についてさえも。

フ란ツは、何故か、自分は悪戯いたずらやその他同じ年頃の少年のする馬鹿なことは、決してしないものと傍からちゃんと定められているような窮屈さを感じた。

たまに何かやると、人々は真面目に、大人に対してのように言葉寡くすくな憚はげきを示した。そして彼から、弁解や活潑な口応えや、止められたことをまたする冒険の面白さを殺そいでしまった。

彼は、何とも知れず厳かな雰囲気、到るところ自分の行く先について廻るのを知った。彼の少年らしく野放しな陽気さをのぞむ心持、腕白小僧のように遠慮なく大人とふざけ廻って見たい気

持は、皆、そういう彼の力ではどうしようもない何物かで阻まれてしまうのであつた。

これ等の、内へ内へと、自分の憧れや、楽しさを追い込まれる寥^{さび}しさが、全く、不思議な自分の顔立ちの故だとはつきり解つたのは彼が十五の時であつた。

その年の秋、例年通り、村長の持ち山で、胡桃^{くるみ}もぎの年中行事があつた。

フランクもその年から村の若者の仲間入りが出来る筈であつた。彼は、白絹の晴着の襯衣^{シャツ}をつけ、父親の他処行を直した天鷲絨^{ビロード}の半洋袴^{ズボン}をはいて、隣りのエルンストと出かけた。山には荷車に載つて行つた小綺麗な身なりの娘の一隊が待っていた。

村長が振りまわす杖の先で、笑ったり犇^{ひし}めいたりしながら、若者達と娘等に入り混つて幾組もに分れた。

娘達は、皆手にリボンで飾ったいろいろの形の籠を下げた。男どもは、先に鉤のついている長い枝下げ棒をかついだ。フ란ツは、二人の小つぽけな娘と組になった。

二人とも同じように薄赭い少い髪を編み下げにし、狭い胸に黒天鷲絨の胸衣^{ボディース}をつけている。始りは少し間がわるかつた。けれども、片方の、雀^{そば}斑のある娘が、

「あら！ お前さんのズボンもビロード？」
と叫んでから、すっかり極りわるさがとれた。フ란ツは、元気よく二人をつれて樹の間に分け入った。

彼方此方から、楽しそうな笑い声や、陽気な合唱、木の枝のざわざわいう音が響いて来た。

組と組とが、ひよつくり樹の陰から出会いでもすると、両方どつと悦びの声をあげた。娘達は籠を覗き合う。或る者が入れ換る。傍では手を叩いて笑い囃す。ぱたぱた馳ける蹠音。その秋の一日は非常に麗かであつた。

小さい娘達とフランツも工合よくやつて行つた。

彼は、どつさり果^みのついている枝を見つけては、低く低く、いつまでも娘達のもぎきるまで曲げていてやつた。娘共はずるく牒し合わせ、わざとのろのろ暇をかける。フランツが手を怠^{だる}くして枝を離すと、彼が余り早く手離したと云つて怒つた。怒りなが

らふきだした。

虫食いの不具な果でもつかむと、彼女達は、

「いやなフランツ！ 虫つくい」

と、彼にその果をぶつつけた。

はははは。もつとぶつつけろ、もいだ胡桃をみんなぶつつけろ！
フランツは樹に登るぞ。彼は登った。乾いて好い匂いのする
葉の間へ本当に隠れた。そして、ばらばら枯れ葉をお下髪さげの頭に
ふるい落す。

が、またいつの間にかするする裏板から下り降り、上ばかり見
上げている娘達の鼻先に、ばつさり好い枝を引き下げて、愕おどろかす
のだ。

楽しい胡桃山の上に日が移った。

樹々が長い濃い影を地に落す時刻になると、再び村長の杖が皆をかり集めた。

若い者達は、村まで歩いて帰ることになった。荷馬車は村長と胡桃を載せて、謝肉祭の山車のように列の真中に割り込んだ。

フ란ツはエルンストに会い、暫く彼と一緒に歩いた。

山合いの曲った草道を抜けると、路は、なだらかな傾斜の耕地に出た。遙か遠くに村の教会の塔が見え、頂の十字架が、西日でキラキラ燃えるように光った。それも段々薄れて、やがて見えなくなり、四辺に低く夕暮の靄が這い始めた。もうよく見分けられない列の前方から、足に合せた速い調子で「早起きトッド」の歌

が聞え始めた。

フランツは、ふと、連だった小さい娘達のことを思い出した。

彼はエルンストと別れて、歩調を早め、列を前に通りぬけて見た。娘達はいた、やはり二人かたまつて、少し大きい娘の傍にくつついて、黙ってせつせと歩いている。

フランツは、顔を見定めてから傍によつて行つた。

「一緒に歩こう」

声をきき、顔をじつと見、それがフランツだとわかると、どうしたわけか、外側にいた一人が、返事もしないで、ずっと大きい娘のむこう側に隠れてしまった。

フランツは、少し寒くなつて来た暗がりの中で苦笑いした。暫

く経ってから、彼は此方側にいる雀斑の娘に云った。

「お連れになろうよ。その籠をお出し、持って上げるから」

その娘は逃げない代りにまるで無愛想な口調できっぱり、

「いや！」

と断った。そして、益々空いた片手を振りながら、真正面を見て、歩きつづけた。

「いやよ、私触っちゃいやよ。——ガスタブがお前は悪魔だつて云ったわよ」

フランツは、小さい娘をじろりと見て、肩を揺った。娘は、止めどがなくなつたように、また云った。

「ガスタブばかりじゃあないわ、みんなそう云つたことよ。お前

みたい——うう、時計屋の子の癖にそんな——イエス様みたいな顔をしているなんて、てつきり悪魔に違いないって。だから私」娘は睨むようにフランツの顔を見た。フランツはおどろいて娘を見た。

「触ってなんか貰いたくないの」

二三歩、小娘は、こわさを我慢してしゃんしゃん歩いた。が、フランツが一寸手を動すと一時に「わーッ」と声をあげ、三人一度に転るように彼の傍から駆け去ってしまった。

フランツは、ぼつり独りで、頭を垂れ、列を脱れて日暮の路を帰った。

その晩、フランツは生れて始めて、しげしげと鏡で自分の顔を

見た。娘の云ったのは嘘でなかった。

床に入ったが、寝つくどころではなかった。彼には自分というものが、まるで解らなくなってしまった。

屋根部屋の窓から光が差し、寝台の裾から床に蒼白い月光の湖を作っていた。時々、黒い木の小枝や葉の影がちらちらする。

フ란ツは、寝鎮った夜の裡で、沁々考えると、何ともいえない陰鬱な恐怖に襲われた。自分の前途には何が待っているのだろうか。

神は、思いも設けない時計屋の子の自分にこんな特別な相貌を与え、神の子を顕させようとするのか。または、本当に恐ろしい悪魔の力が自分に悪戯したのだろうか。

フ란ツは、寢床を出て、水のような光りにさらされている木

のむき出しの床に跪いて永いこと祈った。寥しい、胸の引きしめられる苦しさが起つて、彼は涙を流した。

もう到底平気で父に貰った聖画の基督を見ることは出来なくなつた。万聖節の晩、父親が何故あの絵の傍に自分を立たせたか解るとともに、その記憶は、彼に、いくら十字を切つても切りきれない、堪え難い心持を起させるのであつた。フ란ツは、裸足のまま立上つて、机の傍へ行つた。そして、顔をそむけて、そちらを見ないようにして、少年イエスの画像を暗い壁の上からとりおろした。

青空文庫情報

底本：「宮本百合子全集 第二卷」新日本出版社

1979（昭和54）年6月20日初版発行

1986（昭和61）年3月20日第5刷発行

底本の親本：「宮本百合子全集 第二卷」河出書房

1953（昭和28）年1月発行

初出：「中央公論」

1924（大正13）年1月号

入力：柴田卓治

校正：渥美浩子

2002年1月1日公開

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

顔

宮本百合子

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>